
デンシジショ— 1

爽乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

デンシジショ―1

【Nコード】

N3704L

【作者名】

爽乃

【あらすじ】

どんなに古くても――。

どんなに昔のタイプでも――。

あたしにとってはかけがえないデンシジショ。

あの日、カレとあたしを繋いでくれた。

言葉を伝えてくれた。

大切な、デンシジシヨ——。

第一話はプロローグ。

カレとあたしのとっかかり。

デンシジシヨ（前書き）

まだまだ未熟ですが、どうぞ最後まで読んでやってください。

デンシジシヨ

あたしは、窓から桜並木を見て考えた。

ちなみに今は、授業中だけど、そんな野暮なことはどーでもいい。

いいよね。桜って。

別にさ、種を作るわけじゃないのに、咲くただけに咲くんだもん。

中にはサクランボを作る桜もあるんだろうけど、ガッコーの桜は違うし。

よく、『将来の夢がなかったり目標がないのはかわいそうだ。』って大人たちは言うけど、あたしはそうは思わない。

勝手に決めつけないでほしいよね。

それで、『将来の夢のために勉強を…』だなんて、いい迷惑。

その代表にあたるあたしは、自分を嘆くことしかできない。

どーせ、あたしや、日本の未来なんて大したものじゃないもんね。きつと。

「いいか。これは、受験をつけるにあたって大切だからな。」と、数学の先生が言う。

……現実逃避の言い訳かもしれないけど。

こうゆう（お母さんにゆうと「こう」言う）でしょ！もうすぐ試験なのに！」と怒られる）、考えて言うか、言い訳？は最近思いついたものだ。

去年までは良かったんだ。

目的もなくぶらぶらしてられたから。

今年は…今年は、違う。

『コーコージューケン』とゆう、目標があるんですよ。

だから、目標というのはない方がのんびりしてられていいんです！

ってゆうか、正確には、目的はあってもいいけど受験はあってもほしくないだけ。

受験って言うのをごまかすために目的って置き換えただけなんだよね。

「君たちも今年は受験だ。しっかりやってくれよ。こんな問題も出ないんじゃないか…」

あゝあ。先生、「今年は受験がないんだ。」って言うてくれればいいのに。

あたしは、先生のくだらないオハナシが嫌になって、窓を見た。

首を動かした途端、風が吹く。

あたしは心の中で桜に呼び掛けてみた。

サクラ、サクラ、あたしの春に咲いてくれる？

ベンキョーしたくないんだけどさ、努力もしないけど、咲いてくれる？

来年の春。『サクラサク』？

……勿論、桜は何も言わない。

分かってるのに、なんかムカついて、あたしはちょっとバカにしてみた。

別にアンタが咲いたって咲かなくなたって、あたしの試験の結果は変わらないし。

どーせ、アンタなんかに変えられないでしょ。

変えられるの？アンタみたいに、ひらひらしたヤツに？！

できるって言うんだったら、あたしのいる3階まで来てごらんよ。

運命を変えられるなら、ここまで来るのは簡単でしょ。

……あたしみたいに太ってないんだしさ。

部活が終わった途端、縦の成長期が終わって、代わりに横の成長

期が来たのっ。

悪かったねっ。

散々、桜に八つ当たりした。

心の中のあたしはゼエゼエしてて、桜は澄ましてる。

現実、口をとがらせていて、桜はそこにいるだけ。

少し、すっきりした。

返事がないのは少しさびしいけど、口答えされるよりはマシだも
んね。

「おい！稲波！稲波^{いななみ} 志輝^{しき}！聞^きいてるのか！」

突然、さっきまで説教していた先生が言った。

「え？あ、あつと、はいっ。」

「外なんか見てて、余裕だな。東大でも受かりそうな余裕だな。」

センサー、あたし、まだ14歳です。もうすぐ15だけど。

と思っただけど、言わない。

言っ^つてやっ^つてもいいけど、そのあと叱^ちられるのがめんどくさいし。

センサー様の言う、ジュケンのための内申もある事ですし？

先生は鼻を鳴らすと言った。

「じゃあ、答える。問4。」

げげっ。

聞いてなかったし。知らないし。

でも、返事しちゃったし。なんかヤだけど、謝ろっかな…。

「なんだ。お前聞いてなかったのか。」

あたしが考えていると、先生が言い、その言い方にムカついた。

「聞いてましたからっ。そんな風に言われるなんて心外ですね。」

『シンガイ』だなんて言っちゃって。漢字書けるわけ？

バカだな。あたし。

今更だけどさ。昔からだけどさ。

度胸だけで、自分の意見も信念も持ってないくせに。

バカバカバカバカバカバカ……。

妹の歌を聞かせてやりたいよ。全く。

「ばーかあーほどじまぬけー。」

アイネ・クライネ・ナハトムジークに合わせていつも歌ってるヤツ。

その度にママに怒られてる、調子はずれの歌。

いつも聞いてるでしょ。あたし。

桜相手にケンカ売ってる場合じゃないよ。

そう言えば、ケンカって売るっていうよね。

何円で売れるのかな。１ドルとか。もしかしたら、ユーロで売れるかもね。

ケンカはバンコクキョウツーだし。

多分…。

って、そんなこと考えてる場合じゃないよ！

他人事みたいに自分に言い聞かせちゃって。

考え始めたあたしに先生が言う。

「ほら、とつとと答えろ。」

ええい。うるさいヤツだな。考え中だったの。

五月のハエのようなヤツだ。全く。（五月蠅いとかいて、うるさ

いと読む。)

人をバカにするような言葉ばかり知ってて、まともなことなんて一つも知ってないくせに。

どーせあたしは、五月の八エより下だよつ。

腹が立ったので(給食前だからかな)、あたしは勢いをつけて立つ。

椅子を蹴っ倒し、机をバンと叩く。(一番後ろの席なので、一応迷惑はかからない。)

でも、対して威力はない。

気の弱い男子がびっくりし、先生が少しばかり、身を震わせるだけ。

……あと、あたしの手が痛いのと、椅子がちょっと痛むくらい。

クラスの女子や、フツの男子は、呆れた顔であたしを見るだけ。

いつものことだもん。

この間の体育の授業なんてもっと悲惨だった。

その日はハードルだったんだけど、思うようにタイムは出ないし、サッカーをやってる男子たちはヤジ飛ばすし。

腹が立ったから、授業の最後にタイムを計った時、全部足の裏で

ガンガン蹴っ飛ばして行つた。

靴を履いてたからそんなに痛くなかったけど、タイムは30秒。

思つたよりは早かつた。

でも、ハードルは1メートルくらいぶつ飛んで、先生にドン叱られた。

先生の怒りも、あたしは対して応えなかつた。

叱られるのはめんどくさいから、先生が出張の時に、また蹴っ倒そうかなと考えている。

その時の目標タイムは、27秒つてことで。

さて、数学の問題は何かつて言つと、まあ、うん。

2年生の復習（復讐）、及び、応用、発展なんだけど。

授業をまともに聞いていなかったあたしは、さっぱり分らない。

だって、部活で疲れてたから、授業中は寝てたんだもん。

エヘッ。

問題、何か教えてほしい？

やだよ。

こんなのも解けないの？ってバカにされるもん。

それに、問題の意味が分かんないから、発音がおかしくなるかも。

さて、大ピンチでございますよ。

ホントにどうしよう。

先生に投降しようか。

でも、その先生、ざまー見ろって感じで、あたしを見てる。

……前、イタズラしちゃったからな。

まさか引つかかるとは思ってたんだけどね。

教室の扉に、チョークで汚れた黒板消しをはさんでおいたんだ。

イタズラ終了後、あたしは先生にがちりと叱られた。

ううー。

かくなる上は、集団自決か。

みんなで授業のボイコットってことだけど……。

誰も相手にしてくれないよな。

遁走、いや、逃走するか。

あたしが黒板を睨みつけて、考えてるふりをしながら悩んでいると。

——トントン。

机に置いた手を、誰かが叩いた。

あたしがうつむくと、そこには電子辞書が開いてあった。

『えつくすはさんじゅうごわいはにじゅうご』

X破産？十語？わいは二十五？

あ、違う。Xは30。Yは25ってことか。

平仮名で打ってあるので分かりにくいけど、一応理解できる。

あたしが左を見ると、電子辞書の持ち主はニツと笑った。

日住^{ひずみ}だ。日住 紳。

あたしは、『ありがと』と口ばくで言うと、前に向き直った。

「？」30で、Y＝25です。」

あたしが自信満々に言うと、

「それで？」

え？

先生、何？その突っ込み。

あたし、危機を脱したはずなのに。

なにゆえですか？

あたしがポカンとしていて、先生は言った。

「稲波、去年っていうか、一昨年からやってるだろう。」

文章題のXやYは、自分で勝手に置いた文字なんだから。
A君とB君の分速は？」

はい、どーぞ。というように、先生は言った。

あたし、A君やB君なんて知りません。

そう言い訳したかったけど、そんなものは通じないにきまつてる。

日住の方をちらりと見たけど、日住は気づいていない。

プリントの端っこに落書きをしている。

もう！

適当に言っ飛ばえ！

「A君が、30mで、B君が25mです！」

「残念だったな。反対だ。A君が25m。B君が30mだ。」

先生が、ざまーみる。という顔で言った。

チエツ。

日住のバカ。

休み時間。

「悪かったな。」

日住が言った。

まあいいや。

許してやるよ。

なんか、ちょっと嬉しかった。

ピンチの時に助けてくれるようなヤツだとは思ってなかったから。

ありがとう。

続く

デンシジシヨ（後書き）

はじめまして。

爽乃です。ソノと読みます。

まだまだ未熟ですが、よろしく願いします。

是非是非、評価なども。

厚かましいかもしれませんが。

リアルな恋を描けるよう、日々精進してまいります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3704/>

デンシジショ—1

2010年11月14日10時50分発行